
異端四大魔術師の弟子！

水仙 嘉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端四大魔術師の弟子！

【NZコード】

N9436C

【作者名】

水仙 嘉音

【あらすじ】

東西南北に分かれた四大魔術師それに弟子入りした四人の弟子の話。基本ギャグで進行します。

1：鏡の魔術使いと//一丈振袖娘（前書き）

ハチャメチャなギャグ路線で行きたいと思います。
お楽しみ頂ければ幸いです。

1：鏡の魔術使いと//一一丈振袖娘

俺が見たその人は黒い振袖を纏っていた。

何となく振袖の長さを目で追つていたら

「つて、え！？ なんで//一一丈！？」

「そんなにじろじろと見ないで下さい！」

思い切り殴られました。

ビンタを受けた頬をさする茶髪のメイドが一人。

そして、その隣でむすつとした顔をしている振袖姿の少女が一人。
そこには違和感がある。

メイドが男である事と振袖の丈が短くなればその違和感は消える
だろう。

「だからあー、『めんつて言つてるじゃん』

「いいえ、あれは許しません。絶対に許しません」

「そんな頑なに拒否しないで欲しいんだけどなあ……」

二人の邂逅は今から十数分ほど前まで遡る。

全てはメイド姿の彼がいるこの邸宅に彼女とその師匠が訪ねて来た
事から始まつた。

アリスなどという悪戯としか思えない名前をつけられたメイド姿の
彼は西の魔術師の弟子である。

そして、ヴァリッサという名を持つた黒い振袖を着た少女は東の魔
術師の弟子だ。

互いの師匠が会つという事でまるでついでのように連れて来られた
事が出会いのきっかけだつた。

が、実際は師匠同士が弟子をつけて何年目かになるので互いに見せ
合おうという作られたきっかけである。

名前が可愛いからなどというふざけた理由で弟子にメイド服を着せ
ているような師匠の友人とその弟子だとつりので面白半分で見に来
てしまつたのが最後。

本来ならば脚全体を隠していなければならぬ箒の布がなく、殆ど
ぎりぎりのところで布が途切れてしまつてゐるのだから驚きだつた。
そして、それを纏つてゐる少女がまた自分モロ好みの可愛らしい娘。
思わず前傾姿勢になつて眺めてしまつたが、流石に一発の平手打ち
を喰らう事になつてしまつた。

全面的に悪いのは少年の方なので、彼としては自分のデリカシーの

なさに謝罪しか出て来ない。

何より全く恥じらいという物がない師匠の傍で数年を過ごしている所為で新鮮すぎる少女の反応を予測出来なかつたのが一番痛い。女性にそんな事をしたら嫌がられるのは当然じゃないかと今更ながら気付いたのだが、しかしどの謝罪にも少女は応じない。

「『めんつてば。うん、俺が悪かつたつてば』

「嫌です。受け付けません。絶対、お師匠様に言いつけます」

「やつ！ それはやめてよ！ 僕の師匠に伝わつたら絶対に弄られるから…」

きっと数週間ほど『セクハラメイド』とか『わいせつメイド』などといった嫌がらせのようなあだ名をつけられるに違い無い。アリスはそう思いながら何とかヴァリッサを宥めようとするものの、保身に走つた発言が更に気に触つたようだ。

機嫌が直るどころか眉間に皺まで寄せてしまつてゐる。

思わず、折角の美人が台無しだよと言おうとしたが、それで更にへそを曲げられてしまつても困る。どうしたものかと考え込んでみたものの、どうにも対応のしようがなくて頭を垂れるしかない。

「大体、私の服装を突つ込む前に貴方こそ何ですか」

「俺の服装こそ突つ込まないで欲しかつたなあ……」

「はあ……まあ、私と同じクチなのでしょうけど」

彼女の言つ通り、彼ら二人は別に趣味で互いにそんな格好をしてい
るという訳ではなかつた。

魔術師の変な決まりというか仕来りというか、そんなもので『師匠の言葉は絶対』とある。

その所為で半ば嫌がらせとセクハラにしかならないような格好まで

受け入れざるを得ない。

師匠の言つフアッシュヨンを受け入れるか、それとも魔術師となる事を諦めるかの究極の一択である。

それでやめていく卵達も多いのではないかと思われるが、何にしたところで魔術師の弟子になるつと云うのがそもそも変わり者なのだ。今更どうなつたところでむしろ魔術を習つ事が優先される。魔術師の弟子になつた変わり者という事よりも弟子になり損なつたという事の方が汚点なのだ。

「うん……ま、その、ともかく、『めんつて。』『最近ろくに女の子とか見てなくて』

「物珍しさで変態行為を行ないましたと報告しますよ」

「なんで！？ 俺そこまで変な事してないじゃん！」

自分の言い訳じみた言葉に半眼になりながら冷たい視線を注ぐ、ヴァリッサにアリスは思わず悲鳴にも似た声を上げた。

しかし、ヴァリッサの方はそんな事にはまるで頬着せずに溜息をついて紅茶を啜り始めている。

テーブルが広いせいで同じ空間にいるといつに妙に距離を感じさせてくれる。

「別にそん中に顔突っ込んだりとか脱がそつとしたりとかしてないじゃん！？」

「言つておきますけれど、そんな事をしたら変態どころか犯罪行為です。そんな事をするくらいうら消えて下さい」

納得がいかないといった様子で喰くアリスに、ヴァリッサの容赦ない言葉が矢のように降り注ぐ。

確かにそうだけど、と中途半端に納得がいったらしいアリスはひとまず浮かしかけた腰を下ろして溜息をついた。

「初対面の女の太腿に顔を近づけるだなんて痴漢同然です。痴漢は社会悪です」

「そ、そこまで言つかな……」

「ちなみにセクシャルハラスメントの基準は女性の言い分です」

「いや、うん、まあ、その、基本的にはそうかもしけないけど……」

「せりに言いますと私のお師匠様は極端なフェミニストです」

「この子かなり怖い人だよーっ！」

セクハラという物について男性の被害者も有り得ますだなどと無駄な反論を考えていたところで新たな攻撃が炸裂した。

思わず仰け反ったアリスはテーブルを叩く勢いで手を突いて叫んだ。東の魔術師の異様なまでの『フェミニスト』っぷりは相当有名な話である。

恐らく、彼が裁判官であればどんな事件も女性有利に進むであろうとのフェミニストっぷりなのだ。

むしろ女尊男卑とも言えるかもしだれない。

それに言いつけてやるというのだから恐ろしい事この上ない。

「貴方が悪いんです」

だから謝っているじゃないかだとか言つ言葉は通じないのだろう。眉間に皺を寄せたまま不機嫌さを露骨に顔に出してひしゃりと言つ放つ彼女へもう何の言葉も出て来ない。

「そりや 全面的に俺が悪いんだけどもさあ

再び宥めようとした始めた彼の言葉を遮るかのようなタイミングで扉が開いた。

ビクッと肩を揺らしたアリスが恐る恐る振り返り、ヴァリッサが静

かに立ち上がりつてその扉を眺めた。

扉をくぐつて現れたのは二人の魔術師。

一人は肩辺りで切り揃えられた銀髪を持つ青年で、もう一人は綺麗な青い髪を腰に届くか否かのところまで伸ばした女性。

両者揃つて笑みを浮かべているが、青年の笑みがにっこりとしたものであるのに対して女性の笑みはどこかにやにやとしたものだ。

「…………お、あ…………し、ししょー」

「聞いたぞ聞いたぞ、寧ろ聴いたぞ。何をしてるんだ変態メイド」「なつ、何それ！ 僕の想像より更に酷いッ！」

もはや涙目になりつつある弟子を更に追い込むような真似をしたのは女性の方だ。

西の魔術師と言えば四大魔術師としてかなり有名であり、同時に誰も手がつけられないほどの中魔女ウェインである。アリスという名前が可愛いというだけで彼にメイドの姿をさせていふ事から近年は一部にサディスト説が浮上してしたりする。ちなみに彼女が幼少期からかなりのいじめっ子だったという事は一部の人間しか知らない。

「お師匠様。お話は終わりましたか？」

「ああ、終わったよ。辛かったね。そこのメイドさんに弄ばれて」「ちょっと、そつちはそつちで話テッカくなつてない！？」

よしよしと弟子のヴァリッサを抱き締めんばかりの勢いで頭を撫でる青年。

彼もまたウェインと同じく四大魔術師として有名な東の魔術師で唯一鏡を使った魔術操るとされるイルヴァだ。

正確な年齢は不明だが、存在していた時間から考へると有り得ないほどに若い外見を保つてゐる。

それはウェインも同じであり、四大魔術師は揃いも揃つて若返りの術でも使っているのではないかと若い魔術師の間で専らの噂である。

「ていうか、俺はもうビンタといつ覗を受けているんだけどー。」

バンツとテーブルを叩いてまで「口の受けた行為を主張したアリスであつたのだが、しかしどうやらこの場にそれを聞き入れる者はいないようだ。

ヴァリッサはどこか不満そうな目を向けているし、その脇でイルヴァは信じられないといった顔をしているし、唯一の身内である師匠ウェインは素知らぬ顔である。

この世には神も仏もいないのかと遠い目をし始めるアリスの事などこれっぽっちも知らないぞといった様子で師匠一人の会話が再開する。

「それでどうかな、この子。可愛いだろ?」

「うちのメイドに比べれば可愛くて可愛くて食べそうになるわ」

「いや、比べるもん間違ってるから」

普通は女装した男とミースカの女を比べたりしないだろと思いつながら力なくツッコミを入れるもあっさりと流されてしまった。

そろそろ自分の存在について自己問答でも始めそうな様子の彼に、ヴァリッサが数歩だけ近付く。

しかし、どうやらそれ以上は距離を縮めるつもりもその必要性も感じていないうらしい。

どうにも絶対手が届かない位置を保たれているのが辛い。

「……その、次からしないといつのでしたら今回は許します」

「マジで? はー、ありがとー。女の子に嫌われつ放しだつたら辛いとにかくだつたよ」

「ちなみにその”女の子”とこの単位で区切る事に関して差別のような気がします」

和解出来たと思つた瞬間の掌を返したよつたさに思わず溜息を零したアリスだったが、すぐに気を取り直したように姿勢を正した。正直なところ、そんな姿で女の子相手に名乗りたくなかったのだが仕方がない。

「じゃ名前教えてくれよ。俺はアリス……いや、違うよ？ 变な趣味とかじゃないよ？」

「は、はあ……私はヴァリッサです」

「ホントだよ！？ マジで変な趣味じゃないんだってば！」

どこか信じていなさそうなヴァリッサに対しても焦り氣味に言葉を入れたが、どうやら更に疑いを深めてしまったらしい。このまま何回否定したところで否定した数だけ疑われosoなので今はやめておじうと溜息で自分を誤魔化してみるアリスであった。そこで思い出したのが、かつて両親に名前について追求した時のこと。

『『父ちゃん！ なんで俺の名前がアリスなわけ！？ 何か間違つてない！？』』

『『いや、それは母さんが「女の子が生まれたらつけたい」と言つていて……』』

『『それ女の子の場合じゅん！ 俺ビビつ見ても男じゅん！ 何なら脱

ぐよー』』

『『あら、母ちゃんは可愛いこと思つわよ』』

『『そりや可愛いだらうよー。女の子の名前じゅんかーー』』

『『名前に合つよう可憐へなりなセー』』

『『なんでだよーー』』

いつそ母親を殴りたいと思つた瞬間で回想が途切れた。

俺の人生はどうしてこうも人に遊ばれているのだろうと泣きたい気分になっていたのだが、師匠の手招きでそれが止まる。

いつもは嫌がらせしかしない師匠だが、『』ではある意味でありがとうであった。

「何だよ、しょー」

「その師匠を師匠と思わぬその態度がどうだ、変態メイド」

「いや、そんな名前じゃないんだけどー！」

アリスの悲しみの籠もった叫びも虚しく、師匠ウェインは全く気にしてもらいかのような様子である。

実際、微塵とも気にしていないのだろうといつ事が伝わって来るの更に落ち込んでしまう。

ほんの一瞬であるとは言えこの師匠の呼びかけにありがたみを感じてしまった事が馬鹿のようだ。

「なあ、変態メイド。今回ばかりと色々あって、四大魔術師全員が面合わせしなきゃならんのよ」

「そのまま呼び続ける気だな……はあ、んじゃ行つてらつしゃい

「阿呆めが。私が出掛けるだけなら声など掛けるか

「いや掛けろよ」

「お前もついてくるんだよ。四大魔術師の愛弟子をお披露目し合つのも目的だからね」

ツツコミをあつさりと流されてしまい、肩を落とすメイドを押しながら扉へと向かったウェインは東の魔術師弟を振り返つて顎でしゃくつてみせた。

すると、それに応じるように頷いたイルヴァがヴァリッサの頭を撫でながらにっこりと微笑んだ。

その笑顔で、自分も行くのかと納得する彼女を促しながら扉へと向

かう。

「残るは南北の二人だね。いやあ、久々だなあ」

「サナルはともかくとしてノイリーの方は会えるかどうか分かつたものじゃないぞ」

「まあ、彼の場合は昔つからそれだからね。今更^{アラシ}にする事でもなれやうな感じがするよ」

そんな会話を交わしながら、師匠一人が前に並んでしまうと必然的に弟子一人が後ろに並ぶ形となる。

ちらりとヴァリッサを見たアリスは、自分との間に人間一人分ほど空間を空けられている事に軽くショックを受けながら溜息を何とか飲み込んだ。

まあ、さっきの事があつて今なのだからすぐに馴染めというのは無茶な話だろう。

「ああ、忘れていた。なあ、変態」

「ちよつ！ その略し方はやめてくれよー。」

「ならメイド？ ま、何でもいいだろ」

「よくないんだよー！」

くるりと振り返った師匠の言葉に思わず声を荒げてしまつたアリスであつたが、それが煩かつたのかヴァリッサには更に距離を取られてしまつた。

こゝまでくればどうにでもなれ、なるようになれと思つてしまつ。

「煩いヤツだな。なら手短にストレートに言つた。『弟子同士仲良くするよ』に『な、以上』

「はあつー？」

意味不明さに思わず抗議の意味を籠めて声を上げたものの、やはりそんな彼の反応などウェインの前では道端の石程度のものらしい。さすがと前に向き直ってしまったウェインは隣のイルヴァと談笑を再開してしまっている。

そうなつてしまつた師匠に再び自分への興味を持たせるのはほぼ不可能だという事をよく知つてゐる彼は肩を落として溜息を洩らした。

「ああ、もう……なんでしょーつてワガママなんだ！」
「やうこつものだと思いますよ」

さらりと返つて来た言葉に思わず顔を上げたアリスは隣から様子を窺つような視線を向けている彼女と目が合つた。

まさか自分の独り言に返事が来るだなどと夢にも思つていなかつた為、反応が遅れてしまつ。

「や、そうかなあ……」

「何でもかんでも手に入れた人間が謙虚なわけがありません」

「そう言われると、そうかもしだいけれど……まあ、そうなんだろつね」

魔術師の弟子というポジション以外に共通点などないと思つていたが、どうやら師匠に対する認識やらは似てゐるものがあるらしい。その事に少しばかり安心したアリスは落ちてきた前髪を上げながら師匠達が進む道を見た。

先ほどは質問し忘れていたが、この扉から先に進んだのは今回が初めてだつた。

家の中から直接扉で来たというのに、何故だか洞窟のよくなつてゐるのは師匠ウェインの仕業なのだろうか。

「アリスさんは南北の魔術師様やそのお弟子さんとお会いした事は

ありますか？」

「いや、全く……あ、アリスでいいよ」

「そうですか。私もありません。……しかし、アリスと呼ぶと女性な響きが強すぎるのですが」

「さん付けでも同じだよ……あー、俺はなんて呼んだらいい？ なんかあだ名とか」

「ヴァリッサと呼んでください」

これでもかというほどの素晴らしいナイスタイミングで遮られた言葉にアリスは何となく拒絶されたような感じを受けた。

しかし、ここで落ち込んでいたところで何も始まらないしきつと何にもしてくれないというのは先ほどまでのやり取りでよくわかった。この世で味方なのは自分一人だけであると孤独をしつかりと自覚して生きなければならない、などと間違った方向に意識が傾く。

そんな彼を引き戻したのは、ヴァリッサから真っ直ぐに注がれる遠慮ない視線であった。

「…………あ、うん。それじゃ、ヴァリッサ」

「はい。よろしくお願ひします」

危うく彼女の目の前で別の世界に旅立つところであったが、彼女自身の冷たい視線で寸でのところで引き返す事が出来た。

全く相手にしてくれないウェインの対処も辛いところであるが、ヴァリッサのような絶対零度的な鋭い視線というのも辛いものがある。そして、自己紹介から続いてくれなかつた会話の所為でかなり苦しい感じの沈黙がやつて来てしまつた。

前で並ぶ師匠二人は元々から顔見知り というか、旧知の仲といった様子なので話題に事欠かない様子であるが弟子同士はそうではない。

何より年頃の男と女なのだから、というか彼女が結構壁を作るタイ

普なのもあつて更に辛い状態となつて来てしまつている。

吐き出しかけた溜息を飲み込んだアリスはどうにかならないものかと何ともなしに彼女の様子を眺めた。

初対面の時には服装のインパクトが強すぎたが、よくよく眺めてみると相当可愛い顔をしているという事がわかる。

好みを抜きにしても一般的にも美少女で、尚且つ一般的美少女の中に放り込んでも一際輝く美少女だろう。

うつかり惚れそうな勢いであつたが、アリスは自分に自信を持ちすぎる部類の人間ではなかつた。

極々平凡で普通、やや中性的という事を覗けば他には特にこれという特徴を持ち合わせていない自分とつり合ははずがないと溜息をついた。

人は顔ではないなどとは言つが、いかにそうだとしても似合ひなすぎるにも程がある。

「ほほう……」

そんなアリスの様子を肩越しに一瞥したウェインは口許に薄ら笑いを浮かべて声を洩らした。

それに気付いたイルヴァもどこか楽しげな笑みを浮かべてから、肩越しに弟子二人を一瞥してみる。

アリスの方は何やら落ち着かなさそうにそわそわとヴァリッサ眺めており、一方の彼女は全く氣にもしていない様子で振り返つた師匠に小首を傾げている。

「私の読みが当たつたぞ」

「いやいや、私もそうなるつて言つたじやないか」

「賭けにならんじやないか。阿呆めが」

ウェインの不機嫌そうな声が響くと同時に手前の扉が開き、四人を

更にその奥へと招き入れた。

扉の開く音がしたので気にしていなかつたが、よくよく見てみれば扉というよりは巨大な岩であつたという事に気付く。

そして、部屋の方も室内というよりは洞窟の中といった様子で壁一面から薄い紫のクリスタルが突き出ている。

「ししょー、ここは一体？」

「言つてなかつたか？」

「全く聞いてねえよ」

当然説明しましたが何か?とでも言いそうな顔で振り返る師匠ウェインにアリスが脱力しながら即ツッコミを入れる。
しかし、そんな事は全く無視してしまえといった態度の彼女はヴァリッサの方を見てから口を開いた。

「外から出向くには他一人のいる場所は少々厄介なのでな。ここで移送の術でも使おうといつ話なのだ」

「そうでしたか。今から見せて頂けるのでしょうか?」

「勿論そのつもりだ。な? イルヴァア」

突然、話を振られたにもかかわらず相変わらずの笑みを浮かべているイルヴァアは弟子二人にちょいちょいと手招きをした。
自分の師匠なのだから当然逆らう事もなくそちらへ行くヴァリッサに続いてアリスも少々嫌な予感を抱きながらついて行く。
正直なところ、露骨に嫌がらせをしてくるウェインも相当面倒なのだが、こうして笑顔の仮面をつけている彼も彼で怖いのである。
彼が東の魔術師でさえなれば一生関わりを持ちたくない部類に入るとこころだ。

「君達は壁際で見ていいなさい。彼女と私とで発動させるので、よく

見ておくよつに」

「お師匠様。移送の術とはそれほど難しいのでしょうか？」

四大魔術師のうち、一人がかりとなれば自然とそう感じてしまったのだろう。

ヴァリッサが純粋な疑問として問い合わせたが、イルヴァはそんな我が弟子を「可愛いなあ」と笑いながら撫で始めてしまった。こいつはだめだ、とアリスが心底から軽蔑し始めた時に彼女の頭を撫でていた手が離れる。

「難しい事ではないんだよ。ただ、多少場所が遠いものでね。魔力の消費を最低限に抑えたいわけだよ」

果たしてそんな理由が本当なのかどうなのかとじろは非常に怪しいのだが、本人が言つのならそういう事にしておこう。頷いたヴァリッサは無言のままで静かに頷くとアリスを促しながら壁際に寄つた。

何か不満げなアリスと、その横で表情一つ変えないヴァリッサの見守る中で二人の師匠が部屋の中央に立つ。そして、ウェインが右手を天へと向け、イルヴァが左手を大地へと向けた。

ふわりとどこからともなく柔らかな風が流れ、二人の銀と青の髪が無造作に宙で揺れ始める。

それとほぼ同時にイルヴァが振り返り、弟子一人にゆつたりと手招きをしてみせた。

戸惑うアリスを一瞥したヴァリッサが師匠二人のもとへと近付いてしまえば、アリスの方も行かざるを得ない。

四人全員が中央に寄ると、床から薄い光が上がりそれが複雑な方陣を描き始めた。

青とも赤とも言えない光が、徐々に視界を覆い始めていき

そし

て、唐突に弾け飛んだ。

「おおおつー？」

「……ツー」

同時に体を吹き飛ばす勢いで突風が吹き、アリスとヴァリッサが思わず後ろに下がった。

しかし、ヴァリッサは転ぶ寸前のところでイルヴァに抱きとめられたので結局無様に倒れてしまつたのはアリスだけである。そんな役目にはもう何となく慣れてしまつていた彼は溜息をついて師匠を見上げた。

「何してんだよ、ししょー！」

「移送だ、見てわからんのか？」阿呆めが

「はー？ いや、移送つてどこにも……あ、あれ？」

ただ風に飛ばされかけただけだと勝手に思い込んでしまつていたのだが、どうにも今の場所は先ほどの部屋とは違つていた。畳が敷かれた古い小屋のような場所で、先ほどのクリスタルに彩られたあの一室とは似ても似つかない。

困惑するアリスのスカートを引っ張つたウェインはにんまりと笑つて「阿呆めが」と言い放つた。

外に出てみれば、どうやら倭国のようだが、それにしたところどうしてあのような場所に飛んだのかが理解出来ないアリスであった。

「阿呆めが。道端でやろうつものなれば、即刻で轟きになつて再会どころじやなくなるだろ」

「だつたらこんな所じやなくて、南の魔術師つづ一人の家に飛べばいいのに」

「つづづの阿呆めが。外出しているからこそ、その外出先の倭国

に飛んだのだぞ」

少しは頭を使えとウェインが頭を示したものの、アリスはどことなく面倒臭そうな顔でそれを一瞥しただけであった。

もつそろそろこいつやつて馬鹿にされる事にも慣れ始めていたのだが、どうにもそれが悲しくて仕方がないものまた事実。

「というわけで」

落ち込み始めるアリスの肩を叩き、振り返った彼の前に弟子を差し出したイルヴァは崩れないにつこり顔で言い放つた。

「お一人で搜索の方、お願いするよ」

「それは、お師匠様達では目立つという事でしょうか？」

「おーおー、ヴァリーちゃんはよう氣のつく弟子で羨ましいぞ、イルヴァ。そうだ、どうせ真っ赤なのだからすぐにわかる筈だ」

言つが早いが、弟子一人の背を押して踵を返した師匠一人はひらひらと手を振りながらその場を立ち去つてしまつた。

このままこの狭くて暗い路地を抜けたところで宿泊用の施設しかないのだから行き場所はすぐにわかる。

それを知つて知らずか、声を掛ける事もなく頷いただけのヴァリッサは黙つたまま路地から抜けた。

師匠達の方をぽかんと見ていたアリスもそれに続くが、しかしこのようなく知らない広い土地で顔も知らない人物を探せというのは無理そうだった。

「ヴァリッサは倭国に来た事とかは？」

もしもあるのならば結構助かると思っていたアリスであつたが、し

かし現実というのはそういう甘い顔を見せてくれない。

問いかけに對してふるつと首を振つたヴァリッサは溜息をついて立ち止まってしまった。

「そう言つアリスこそ何らかの情報は持つていませんか？」

「じめん。」いうことを俺に頼られても真剣に困る

「でしたらもう頼りません。ところで、南の魔術師 サナル様で

したか。確か、本当に赤いと聞いた事があります」

あつたりと言い捨てられてしまつて正直なところ寂しかつたりするアリスではあつたが、後半の情報にだけ反応する事にした。それにしてもヴァリッサには、どうやら融通というものがあまりないのかもしぬないとしみじみと思つてしまつ。

「マジで赤い……つて、全身?」

「はい。珍しい事に、赤い目と赤い髪を持つのだと聞きました。それで、魔術師の中には『赤女』と呼んでいる者達もいるのだと」「ず、随分と安直なあだ名だな……はー、それにしても赤い女ね。そんなのどうやって」

言葉と共に周囲を見渡したアリスと同じように視線を巡らせていたヴァリッサはそこで時が止まつたかのように硬直した。自分達のいる場所からほほ直線上、道の反対側にある団子屋の店先で団子が刺さつていたのであらう弔を咥えていたのは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436c/>

異端四大魔術師の弟子！

2010年10月28日01時24分発行